

氏 名 金 時徳

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1312 号

学位授与の日付 平成 22 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 「異国合戦軍記」の研究—朝鮮軍記物とその周辺—

論文審査委員 主 査 教授 武井 協三
教授 大友 一雄
教授 崔 官（高麗大学校）
准教授 井上 泰至（防衛大学校）

本論文では、自分の所属する集団の外部に存在する「異国」との「合戦」のことを扱った「軍」の「記」である、仮称「異国合戦軍記」について検討する。特に、近世に誕生・発展した朝鮮軍記物に焦点を当てて、琉球・三韓・蝦夷に関する軍記物との関連性・相違点を抽出することを主な目的とする。

第一章第一節「初期作品群と『太閤記』――一七世紀の「朝鮮軍記物」(一)」では、壬辰戦争に関する初期作品群を紹介した後、その上で成立した小瀬甫庵著『太閤記』所収の壬辰戦争記事を検討し、その特徴を把握すると共に、後続する「朝鮮軍記物」への影響を指摘する。

第一章第二節「中国作品の影響――一七世紀の「朝鮮軍記物」(二)」では、明の『兩朝平攘録』・『武備志』の影響を受けた、堀杏庵著『朝鮮征伐記』・林羅山著『豊臣秀吉譜』・浅井了意著『豊臣秀吉伝』・島津久通著『征韓録』を検討する。堀杏庵らは、『兩朝平攘録』・『武備志』の記事を尊重しながらも、日・中両国の作品の内容が齟齬する場合は、日本の作品の方を優先し、また、自分が仕える主君の立場に配慮した執筆姿勢を貫く。

第一章第三節「韓国作品の影響――一七世紀から一八世紀へ(一)」では、朝鮮の柳成竜著『懲毖録』・『西厓先生文集』が近世日本に受容されていく過程を検討する。一七世紀の後期までに東アジア三国の壬辰戦争関連作品が日本に集結され、一七〇五年刊の姓貴著『朝鮮軍記大全』・馬場信意著『朝鮮太平記』の二作品に集成される。『朝鮮軍記大全』の場合は先行作品の記述を尊重する姿勢を示すのに対し、『朝鮮太平記』の場合は、より自由な執筆で、面白い読み物の創作を目指す傾向がある。

第一章第四節「「加藤清正作品群」の展開――一七世紀から一八世紀へ(二)」では、オランダ合戦記事に焦点を当てて、加藤清正の一代記的な作品群(「加藤清正作品群」)を検討する。「加藤清正作品群」からは、異国への侵略挿話を異国からの被侵略挿話へと転換させることで、異国との合戦における被侵略意識を増長させる傾向が観察される。また、異国の人々を感化する仁徳の武将としての加藤清正の形象化によって、異国との合戦を正当化する傾向も見られる。

第一章第五節「『黒田家譜』と『朝鮮通交大紀』――一八世紀の「朝鮮軍記物」(一)」では、『黒田家譜』と『朝鮮通交大紀』を検討する。両作品は主君家の公務に備えるために著されたもので、藩外への流布が制限されたため、後続する朝鮮軍記物への影響は少なかった。しかし、両作品を通じて、一七世紀から一八世紀にかけての日・中・韓の関連作品の流布・享受の状況を窺うことができる。

第一章第六節「『朝鮮征伐軍記講』と『絵本武勇大功記』――一八世紀の「朝鮮軍記物」(二)」では、『朝鮮征伐軍記講』と『絵本武勇大功記』とを検討する。『朝鮮征伐軍記講』は『朝鮮太平記』に依拠しながらも、それまでの朝鮮軍記物には見られなかった独自の記事を数多く載せる。一方、毛谷村六助の一代記的な作品である『絵本武勇大功記』からは『朝鮮征伐軍記講』の影響が確認されるが、『朝鮮征伐軍記講』の文章の内、徳川家康への反感が含まれる部分は取り除かれる。

第一章第七節「『絵本太閤記』と『絵本朝鮮軍記』――一九世紀の「朝鮮軍記物」(一)」

では、絵本読本の秋里籬島著『絵本朝鮮軍記』と武内確斎著・岡田玉山画『絵本太閤記』とを取り上げる。以前の朝鮮軍記物に比べ、両作品は、より易しい文章と数多くの挿絵を以て読者にアピールする点で共通する。しかし、『懲毖録』を軸として両作品を比較すると、『絵本太閤記』より『絵本朝鮮軍記』の方が、『懲毖録』の記事により忠実であることが判明する。先行作品により忠実であろうとした姿勢が『朝鮮軍記大全』に通じる『絵本朝鮮軍記』より、読み本としての面白さを追求した姿勢が『朝鮮太平記』に通じる『絵本太閤記』の方が、読者に喜ばれたと思われる。

第一章第八節「『両国壬辰実記』・『朝鮮征討始末記』と『征韓偉略』—一九世紀の「朝鮮軍記物」(二)」では、山崎尚長著『両国壬辰実記』と川口長孺著『征韓偉略』、そして、両作品の周辺で著作・刊行された『征韓雑誌』・『六雄八将論』・『朝鮮物語』・『隠峰野史別録』などの作品を含めて、一九世紀中期の知識人層が共有した、より本格的な歴史書を目指した朝鮮軍記物について検討する。

第二章第一節「『朝鮮太平記』における琉球—『異称日本伝』と『懲毖録』」では、朝鮮軍記物における琉球記事の特徴を検討する。『朝鮮太平記』や類書の『異称日本伝』に載っている琉球記事は、『南浦文集』・『琉球神道記』などの琉球物が伝える琉球情報とは質を異にするものであり、『南浦文集』・『琉球神道記』とそれ以降の琉球物との間に存在する時間的な空白を埋める存在として重要である。

第二章第二節「『椿説弓張月』における〈異国合戦〉—『水滸後伝』と『島津琉球軍精記』」では、曲亭馬琴著『椿説弓張月』における琉球記事(前編巻二・三と続編以降)と、実録『島津琉球軍精記』、中国の長編白話小説『水滸後伝』とを比較する。源為朝の二回にわたる琉球渡海は、源為朝の話であると同時に、島津家の話としても読める余地がある。それを暗示するキーワードが、続編巻二に登場する「尚寧王」である。また、『水滸後伝』の内容を知っていた馬琴周辺のごく少数の人々のためには、「関白」という隠されたキーワードが存在する。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、17世紀から19世紀にかけて近世日本で書かれた、「異国合戦」（朝鮮、琉球、蝦夷との戦い）を記した作品群を考察したものである。朝鮮軍記物を軸において、その展開の様相や特徴を、当該期の朝鮮・中国の作品との影響関係において究明し、さらにそれらを琉球、蝦夷との合戦を描いた作品群とも比較検討することで、近世日本に生じた戦争表象を浮き彫りにしている。

全体は、「序章 〈異国合戦軍記〉と〈征伐〉」「第一章 朝鮮軍記物の研究」「第二章 〈琉球軍記物〉と朝鮮軍記物」「第三章 〈三韓軍記物〉と朝鮮軍記物」「第四章 〈蝦夷軍記物〉と朝鮮軍記物」「結論 〈異国合戦軍記〉の論理」の各章から成っている。

前半部分は、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）をテーマとする軍記を中心に、実録・読本・史論などを包括的に対象としている。この分野は、残存テキストの膨大さもあって、これまで学界で本格的な研究着手がなかった。本論文が、各時代を代表する対象作品を的確に抽出し、その書承関係を追求して、各作品を位置づけたことは画期的な成果である。とくに『懲毖録』などの韓国作品、『武備志』などの中国作品に、日本の作品がいかに関心したかについて調査研究を行ったところは、貴重な成果をあげており、本論文中の白眉ともいえる部分である。具体的に指摘すると「近世文学における朝鮮軍記物の意義は、この作品群が、東アジアの近世文学との交流を通して成長した点にある」との見解、「近世における異国合戦軍記の特徴」として「作者たちの前には、古代以来の軍記物語の流れとともに、朝鮮軍記物という近世の軍記が存在していた」とする見解と、それを導き出す過程である。

後半部分では、朝鮮軍記物の性格が、「三韓征伐」「琉球征服」「蝦夷征服」に関する軍記にも看取できることを論証している。これによって、日本近世の、対外戦争を扱った軍記における戦争の論理が共通すること、その論理は、東アジアの華夷秩序の論理を基礎とする「征伐」の論理であったことを明らかにした。

本論文がなしたとげた、こうした成果は、近世文学研究における新しい視点を切り拓いたものとして、高く評価することが出来る。

今後の課題としては、主として書承関係に置かれた考察に、作品享受への視点を加えることにあるだろう。さらに太閤記ものや『国性爺合戦』といった海外を舞台とする演劇作品などにも視野を広げること、朝鮮通信使など当時の外交関係についての歴史学の成果にも留意することが望まれる。ある意味で敵対的蔑視をともなった日本人の隣国への眼差しが、如何にして形成されてきたのかという、出願者の初発の基本的な問題意識は、これら作品の享受問題を究明することや、対象とする作品を拡大することによって、一層の進展を見せるはずである。これらの点については、すでに出願者は本論文においてその自覚を記しており、今後の展開が期待されることである。本論文は、日本語を母国語としない留学生の文章としては、トップレベルの域に達しており、その努力は高く評価できることも付言しておきたい。

上記のごとく、全436頁におよぶ本論文は、いわゆる「異国合戦軍記」についての論理と書承関係について多くの新見を提出しており、また今後の課題をも明確にし得ているという点において、学界に大きな貢献をなすものであり、学位授与に値するものと認められる。